

2023年4月の総評に代えて

○林 桂○

●ベロニカ●（神奈川県 28歳）

いつか行きたい
場所の名を書き連ね
あの子は先に逝ってしまった。

【評】「あの子」は、闘病で自由に移動できない生活を長く送った後に亡くなったのだろう。回復したら、行きたい場所がたくさんあって、それを書きとめながら。

●桜咲●（千葉県 18歳）

都会の入学式
見つけた
つくしだらけの中庭
いい学校に
きたかも。

【評】自然が適度に残っている都会の大学は、手入れがされず、土筆が伸び放題になっている。この垢抜けないキャンパスの様子をどう評価するか。「いい学校」と感じる作者。志向がほの見える。

● 松下 誠一 ● (東京都 20 歳)

学童に階段で抜きかえされる

【評】歩道橋の階段だろうか。学童は下校途中だろう。遊びながら帰る子どもを抜いて歩道橋まで来ると、先ほどの学童に後ろから抜き返される。抜かれた人を抜き返す遊びを始めたのかもしれない。

● 田崎森太 ● (東京都 72 歳)

王子から蛙になって日永です

【評】グリム童話を下敷きにしている。童話は、蛙の魔法が解けて王子に戻る。ここでは童話で語られない王子が蛙となって過ごす日々が想起されている。「日永です」は、つれづれな蛙の生活ぶりである。

● マズルカ ● (山口県 20 歳)

都会から来た子が一人飲んでいる
遠くの山のそらいろの水

【評】田舎育ちの子が田舎に馴染むとは限らないように、都会育ちの子が都会に馴染むとは限らない。一人自分の住みやすいところを求めてやってきたと覚しい都会の子の感性が解放される。「遠くの山のそらいろの水」の措辞が美しい。

● 林 あゆみ ● (愛知県 45 歳)

ただ眠りたいと帰り着けば
猫もまたただ愛されたいと
ささやかに寄り添う

【評】猫とのふたり暮らしなのだろう。一日の仕事に疲れて眠りに帰るだけの自室に、可愛がって欲しいだけの思いで、孤独な猫は帰りをまっていた。寄り添って生きようとする猫の愛しさ。

● うろ仔 ● (北海道 27 歳)

こどもらが
乗り去った銀のブランコが
わあん、わあん、と揺れて春雷

【評】子どもが去った後の公園のブランコが揺れている。天候が急変して、風が出て来たのだろう。春の雷も鳴っている。

● 貴田 雄介 ● (熊本県 36歳)

押し付ける母を嫌って家を出て
駅前にある手芸教室

【評】母親はとにかく過干渉になりがちだ。子を心配するだけなのだが。その母から逃れる待避所が、駅前の手芸教室であることの面白さ。集中して自分に向き合える場所なのだろう。意外な場所だが、リアルでもある。

● 夏鈍 律 ● (山形県 19歳)

悲しみよ悲しみよ、
水晶のような悲しみよ、
砕け散ってはくれないか

【評】悲しみの解消方法が「砕け散ってはくれないか」。悲しみの救済ではあるのだろうが、それはまた違った悲しみの誕生のようにも思える。

● 猫背の犬 ● (山口県 25歳)

秋刀魚の骨をまっすぐ残す人の

シンカーみたいな箸の持ち方

【評】不器用な箸の持ち方を、「シンカーみないな」と言っている。シンカーは、中指と薬指でボールを挟むらしい。ボールの位置に箸があるような持ち方なのだろう。しかし、秋刀魚の骨だけを真っ直ぐ残すような綺麗な食べ方はする。あるある。